明るいまちづくりをめざして

みんなで一緒に考えましょう

第44回全国中学生人権作文コンテスト

内閣総理大臣賞受賞作品

理解からはじまること

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催

83号

新宮市

新宮市教育委員会

新宮市人権尊重委員会

「理解からはじまること」

福島県　泉崎村立泉崎中学校　3年
大野　結夢（おおの　ゆめ）

私の母は耳が聞こえない。私が生まれた時には、すでに聴力を失っていたので、母の耳が聞こえないことは、私にとって特別なことではなかった。

母は、徐々に聴力がなくなっていく原因不明の難聴で、二十代の前半には完全に聴力を失っていた。大人になってからの失聴で、周りには手話を使える人もなく、口の動きを見て言葉を読み取る「口話」という方法を身につけたそうだ。

母は、いつも明るく元気で、耳が聞こえないことを気にしているそぶりは全く見せない。学校から帰って、その日一日の出来事を母に話すのが日課であり、私の楽しみだ。聞こえなくても、私の口の動きを見て、熱心に話を聞いてくれる。どんな悩みや辛いことがあっても、母に話すと、すっと心が軽くなるのだ。私にとって、母は一番の心の支えだ。

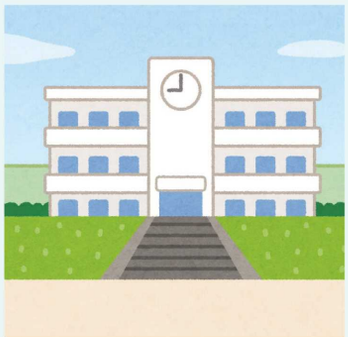
私が小学六年生のとき、五年生の担任の先生から福祉の学習で、私の母に講話をお願いしたいと話をいただいた。しかし、母はすぐに承諾をしなかった。「お母さんが耳が聞こえないことをみんなに知られることで、結夢が学校で嫌な思いをしないかな…」と不安に思ったそうだ。私は「大好きな母がみんなの前でお話するなんてうれしい！」という気持ちだったので、

「五年生の子たちはすごく優しくて、いい子ばかりだから大丈夫だよ！」と迷う母の背中を押した。

依頼を承諾した母は、今までの経験などを文章にまとめていた。できあがった原稿を見て、私は大きな衝撃を受けた。母が「いつも明るく元気な母」になるまで、どれだけ悩み、葛藤してきたか書いてあったからだ。難聴の原因が分からなかったので、たくさんの病院をまわり、どうにか治療法を見つけようとしたこと、どこの病院へ行っても治療法はないと言われ絶望した

こと、耳が聞こえないことを告げると、途端に馬鹿にしたような態度を取る人もいたこと、そんな中でも母の障害を理解し、助けてくれる人もたくさんいたことなど…。「明るく元気な母」になるまで、多くの紆余曲折や葛藤がつづられていた。そして、講話の最後にはこんなことが書いてあった。

「担任の先生から、みなさんの前でお話ししてほしいというおたよりをいただきました。そのおたよりには『誰にでも手を差し伸べられる優しくて、強い心を持つ子に育ってほしい』という先生の願いが書いてありました。でも、実際に手を差し伸べるのは、とても勇気がいることだと思います。実は、障害者の私自身も、周りに助けてほしいと言葉に出すのは勇気がいります。相手の迷惑にならないか、負担にならないか考えてしまうからです。だけど、障害があるからって特別なことではないと思うんです。まずは、自分の一番身近な人に声をかけてみるのはどうかな。家族や友達が困っていることはないか、手助けできることはないか、そんなことを毎日の生活の中で自然に考えられるようになればいいなと思います。そうすればハンディキャップを持った人に対しても、相手の立場や気持ちになって寄り添って『何かお手伝いできることはありますか。』と声をかけられるようになるかもしれません。」



私にとって、聴覚障害者の母がいることは当たり前の日常だ。しかし、障害について何も知識がない人に「私は耳が聞こえないのですが…」と言っても、直ぐに対応するのは難しいだろう。母が周りに「助けてほしい」と言い出せないのは、相手の戸惑いや蔑みを感じることがあるのも理由ではないか。

コロナ禍で、マスク生活が長く続いていたため、口話を使う母にはかなり不便な生活だった。だが、最近、母の耳が聞こえないことを伝えると、マスクを取って口の動きを見せてくれる人、また、すぐに紙とペンを用意して、筆談をしてくれる人がとても増えたのだ。母に「どうしてだろう。」と聞いてみると「もしかしたら、ドラマの影響かもしれないね。」と言っていた。そういえば少し前、聴覚障害をテーマにしたドラマがヒットしていた。耳が聞こえない人に対して、どう対応すればよいか理解され、実際に行動に移せ

る人が多くいるのだ。そう考えると、ハンディキャップを持った人への知識や理解がしっかりあれば、世の中はもっと過ごしやすくなるかもしれない。学校の授業で、福祉体験などあるが、たくさんある中のほんの一部の障害に触れているだけで、本当に理解するには、まだまだそこに割く時間が足りないと思う。

私が、母の障害を特別なことではないと思うように、さまざまな障害の理解が進むことで、障害者という概念を持たずに、その人自身を見られる世の中になっていってほしい。

「健常者が障害者を助ける」という構図ではなく「人が人を助ける」という考えが大切なのではないだろうか。

※原文のまま掲載しています。

人権問題でお悩みの方は、下記まで御相談下さい。
担当者が対応させていただきます。
新宮市役所人権政策課　電話 0735-23-3333（代表）（内線 3102）

この作品は、全国 6,377 校の中学校（特別支援学校を含む）から、721,058 編の応募があり、そのなかの「内閣総理大臣賞」を受賞した大野結夢さんの作品です。

明るく元気な母を大好きな作者が、講話の原稿を見て難聴の治療に苦労した母の描写は読者の心に伝わってきます。最後に「さまざまな障害の理解が進むことで、障害者という概念を持たずに、その人自身を見られる世の中になってほしい。」と綴っています。この中の「その人自身を見る」という言葉は、私たちの身のまわりにある人権問題解決への最も大切な「心のありかた」を教えてくれています。差別や偏見のない心豊かに暮らせる新宮市を、市民みんなでつくっていきましょう。

広げよう　やさしい心と思いやり

令和 8 年（2026 年）6 月